

第3学年 国語科学習指導案

書式は学校の指定に合わせて調整してお使いください。

日 時 令和 年 月 日 () 第 校時
場 所
指導者

1 単元名

「ことわざ・故事成語」 教材名「ことわざ・故事成語」

2 単元の目標

ことわざや故事成語の意味を知り、場面に合う言葉を使える。文章を読み返し、伝えたい場面とことわざや故事成語の意味が合うかを確かめられる。言葉の働きを確かめ、友達との交流を基に自分の学習を見直そうとする。

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①ことわざや故事成語の意味を知り、場面に合う言葉を使っている。 (〔知識及び技能〕(3)イ)	①「書くこと」において、文章を読み返し、伝えたい場面とことわざや故事成語の意味が合うかを確かめている。(B(1)エ)	①学習の見通しをもち、単元で確かめたいことに進んで取り組み、友達の言葉や自分の記録を基に、読み方・表し方を見直そうとしている。

4 指導上の考察

(1) 単元について

ことわざと故事成語の意味を調べ、その言葉が合う出来事を自分で考える。由来の話と現在の使い方を区別する。学習指導要領のB(1)エを中心に据える。関連する知識・技能として〔知識及び技能〕(3)イを、言語活動の中で確かめる。年間計画の重点は知識・技能であり、本案ではそれを使う言語活動の関連項目としてB(1)エを加えている。

(2) 児童について

(学級の子どもの様子を先生が書く)

(3) 指導について

教師が辞典で意味と由来を確認した語を扱う。独自例として「急がば回れ」を、単に道を遠回りした場面ではなく安全な方法を選んだ場面と比べる。おおむね満足できる状況は、文章を読み返し、伝えたい場面とことわざや故事成語の意味が合うかを確かめているという姿で捉える。使った言葉を示さず結論だけ述べる場合は、根拠を確かめる支援を行う。発言の回数や記述の長さでは判定しない。

5 指導と評価の計画（全4時間）

次	時	学習活動	評価規準（評価方法）
第1次	1	○言葉の意味を辞典で調べる。	学習状況を見て支援する。
	2	○由来と現在の意味を区別する。	学習状況を見て支援する。
	3	○合う場面と合わない場面を比較する。	学習状況を見て支援する。
	4 (本 時)	○自作の短い文で使い方を説明する。	知①・思①（発言・学習記録）



6 本時の指導 (4/4)

(1) 本時の目標

文章を読み返し、伝えたい場面とことわざや故事成語の意味が合うかを確かめられる。

(2) 学習過程

段階	学習活動 (○主な発問) ・予想される児童の反応	指導上の留意点 (◎評価)
導入 (分)	本時に使う教材・前時までのノートを確認、自分の最初の考えを短く書く。 ○「この出来事にこの言葉を使うと、何を伝えられますか」 【めあて】ことわざと故事成語の意味を調べ、その言葉が合う出来事を自分で考える。 〈予想される児童の反応〉 ・字の意味を足すだけでは言葉全体の意味にならない。	本時に考える対象を確認し、既に分かったことと、今日確かめたいことを分ける。児童の最初の言い方を残し、まとめて比べられるようにする。
展開 (分)	○「この出来事にこの言葉を使うと、何を伝えられますか」 教師が辞典で意味と由来を確認した語を扱う。独自例として「急がば回れ」を、単に道を遠回りした場面ではなく安全な方法を選んだ場面と比べる。 自分の語や文、話し方を試し、相手が受け取った内容と比べる。直す箇所を自分で選び、理由とともに記録する。 〈予想される児童の反応〉 ・字の意味を足すだけでは言葉全体の意味にならない。 ・由来を知ると覚えやすい。 ・この場面には別の言葉の方が合いそう。	教師が辞典で意味と由来を確認した語を扱う。独自例として「急がば回れ」を、単に道を遠回りした場面ではなく安全な方法を選んだ場面と比べる。 想定するつまずき：登場する物を含む出来事ならどんな場面にも使えると考える、由来を未確認のまま創作する。 児童の考えを教師の想定した言い方にそろえない。理由が確かめられる考えは残し、根拠が異なるときはその違いを板書する。 ◎思① 文章を読み返し、伝えたい場面とことわざや故事成語の意味が合うかを確かめている。(発言と学習記録) ◎知① ことわざや故事成語の意味を知り、場面に合う言葉を使っている。 (〔知識及び技能〕(3)イ)(使った言葉・音読や表記の確認)
まとめ (分)	【まとめ】今日確かめた言葉や表現と、それによって分かったことを対応させて自分の言葉でまとめる。 学習前の考えと比べ、付け加えたこと、残したこと、その理由を記す。 〈予想される児童の反応〉 ・友達の考えを聞いて、自分の理由を詳しく説明できた。 ・この場面には別の言葉の方が合いそう。	まとめの文を先に与えて写させず、児童が本時に扱った具体的な言葉を入れる。 書くことが難しい場合は口述を記録する。次の学習では、その記録を使って自分の表し方を確かめる。 ◎態① (学習前後の記録と、見直した理由)

(3) 板書計画（縦書き・右から左へ）

右端に教材名とめあて、その左に問い「この出来事にこの言葉を使うと、何を伝えられますか」。中央は児童が使った語や文の例を並べ、確かめる箇所に印を付ける。その左に直す前と後の表現を並べ、変えた理由を線で対応させる。左端に、今日確かめた言葉の使い方を児童の言葉でまとめる。縦書きで右から左に学習の順をたどる。

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」 (@mie_ai_katsuyo)
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
みえ先生ラボ

